

## 第 64 回日本寮歌祭に参加して

2024 年 12 月 7 日

小樽商科大学

昭和 57 (1982) 年入学

小西 一郎

2024 年 11 月 24 日(日)11 時からアートホテル日暮里ラングウッドで、第 64 回日本寮歌祭が開催されました。小樽高商(商大)が初めて参加した同寮歌祭についてご報告します。

参加数は、旧制高等学校・専門学校等名で北は北大予科から南は台北帝大予科まで 60 校、274 名(参加者名簿から)。旧制ということで、東亜同文書院大学等や、陸軍士官学校<sup>1</sup>と海軍兵学校<sup>2</sup>など、今は海外である地にあった高等教育機関や軍学校が参加しました。



小樽高商の参加者は 10 名。四高 27、長崎高商 24、拓大予科 16、愛大予科 16、早稲田 14、七高造士館 14、一高 12、山口高商 12、高知高 11、小樽高商 10、静岡高 10、甲南高 10、北大予科 9、神宮皇大予科 9 の順で、初参加乍ら 10 位タイでした。日本寮歌祭の経緯、寮歌の狭義を鑑みる時、我々が唄うべきは高商時代に創設された北斗寮・正氣寮・文行寮・玉の井寮の、或いは智明寮のそれぞれ寮歌だったかも知れません。しかし、昭和 40 年代以降最も愛唱されてきた「若人逍遥の歌」とし、55 番目に登壇しました。2018 年入学・商大応援団第 105 代団長の谷口貴彦が前口上を朗々と読み上げ、正氣寮の旗を振る中、逍遥歌の一番と四番を斉唱、谷口の先導によるフレフレ商大、フレフレ寮歌祭で締めました。我々の一つ前の兄弟校である北大の時には、小樽勢も全員登壇して「都ぞ弥生」を一番から五番まで唄いました。私個人では、学生帽と下駄姿で登壇して二高「天は東北」、五高「武夫原頭に」、七高造士館「北辰斜め」を、撮影し乍ら早稲田「都の西北」、三高「琵琶湖周航の歌」を唄って来ました。参加

人数、会場に轟かせた蛮声等、小樽高商（商大）の存在感を示すことが出来たと思います。



小樽高商（商大）のテーブル

日本寮歌祭は、昭和 36（1961）年 10 月 7 日文京公会堂で開催されたのを嚆矢とします。爾来 60 有余年。昭和は終わり平成も過ぎ、世は令和となりました。幾度かの中止、各校からの分担金等や派遣人員に支えられた組織による運営から会費制への変更、草創期に中心とされた旧制から新制大学出身者への世代交代等々、幾多の困難や変遷を乗り越え、中止の年も数えて今年で 64 回となりました<sup>3</sup>。先達のご尽力に深く敬意を表し、今大会の関係者の皆様に心より感謝を申し上げます。



長崎高商（長崎大学経済学部）の登壇

寮歌祭の存続と発展には参加人数の拡大が必要。其れには、8,000 円の会費について一考する余地があろうかと存じます。

東京のホテルの宴会場を 4 時間半使用するのですから、費用は高いものになりましょう。一方で、参加校の所在地は、極一部を除き東京以外となります。旧制の頃は卒業後に東京の大学に進学する方も多かったでしょうが、新制に移行して其れもなくなりました。更に、近年は地元志向が強くなり、大学進学も就職も出身地域という学生が増加して居ります。地方からの参加には、会費に加えて旅費が掛かります。日本寮歌祭の<sup>いやさか</sup>弥栄の為に、ご検討頂ければ幸甚に存じます。

寮歌について、日本寮歌祭は「(前略) 一般に、寄宿舎の年次創立記念祭の折、寮生自身の

手になる記念祭歌を主として、校歌・運動歌・応援歌・逍遙歌・送別歌・壮校歌などを含むとし、「(前略)旧制高校生の意識や思想、心意気が反映また投影され(中略)その特色は、寮に継承された自治・自立の伝統の謳歌、人生観・国家観・世界観、また寮生の胸中に溢れる青春の憧れや悩み、友情、真理探究など、さまざまな学生生活の哀歌が歌われ」たものとして居ます<sup>4</sup>。寮歌と密接な関係がある旧制高校の蛮カラ主義は、同種のもので英国ビクトリア朝のパブリック・スクールや米国ニューイングランド東部の大学<sup>5</sup>、ドイツの友愛会<sup>6</sup>での学生生活にもあったことから、洋の東西を越えた普遍性が有りました。寮歌という芸術、其れを唄うことで実現する文化が確実にあります。



正氣寮の先輩は、寮歌祭のあの雰囲気は独特なもので、すぐさま昔に戻してくれるとお書きになられました。寮歌を吟ずる時、其の胸中に湧き出る感慨は、清代の詩人である袁枚の詩と同じものでありましょう。

莫説光陰去不還	い なか 説う莫れ 光陰は去って還らずと、	時日は帰らないなどと 言うなかれ
少年情景在詩篇	少年の情景 詩篇に在り。	青春の情景は 昔作った詩の中にある
燈痕酒影春宵夢	とうこん しゅえい 燈痕 酒影 春宵の夢、	若き日の紅灯の跡も酒の色も 春宵の夢も
一度謳吟一宛然	いちたびおうぎん 一度謳吟すれば 一に宛然たり <sup>7</sup> 。	吟ずれば そっくりそのまま眼前に浮かぶ

1 日本寮歌振興会編『日本寮歌祭四十年史』、国書刊行会、2000、p.205 陸軍士官学校は昭和39(1964)年の第4回から参加。

2 『同上書』、p.438 海軍兵学校は昭和41(1965)年の第6回から参加。

3 日本寮歌祭の歴史については『同上書』、p.62~85 『第59回日本寮歌祭』パンフレット、2019、p.4 此れ等から、少なくとも昭和63(1988)年、平成23(2011)年から30(2018)年、令和4(2022)年は中止となって居る。

4 『第59回日本寮歌祭』パンフレット、2019、p.②

5 ドナルド・T・ローデン著、森敦監訳『友の憂いに吾は泣く(上)』、講談社、1983、p.235

6 『同上書』、p.246

7 読み下し文は、松波茂夫編『中国名詩選 下』、岩波文庫、1986、p.490